

視点

「サバイディー」。サバイは心地よい、ディーは状態。合わせて心地よい状態ですか、というラオスのあいさつです。ラオスに渡航し、養蚕の村でホームステイをしました。ラオスでは女性は「シン」という綿や絹の巻きスカートを着ます。シンをはいてないのは外国人だけというほど日常的な物です。

養蚕業は国家的重要産業としてではなく、農業や家事の合間に女性たちが従事し家庭内で伝承されてきた。蚕は原種の黄繭種で卵は自家採取。温暖な気候のため年間を通して養蚕ができる。高床式の住居の下の吹き通しの空間に竹の棚を置き蚕架として使う。繭をつくりその蚕を選別しては、上簇用の別の蚕箔へ移す。繭ができれば糸取りをし、草木染や機織りまで行い反物の状態で販売する。

海外の安価な糸や、鮮やかな化学染料が入りつつあるため、養蚕や草木染が危惧されていますが、シン文化が存続する限り織物は欠かせない仕事として受け継がれると感じました。伝統・文化をまっとう国内需要が蚕糸業を支えているのです。

ホームステイでは、朝はお寺のお経の音で目を覚まし、道で托鉢。朝食は卵焼きともち米。何もなくて「めんね」

と言われたが、ぜいたくな気がした。お父さんは魚の網を修繕して、おじいちゃんの子守している。日中は田んぼのあぜ道等何となく懐かしい景色の中を歩く。民家のそばを通りかかる



甘楽町天引

もり えりこ
森 栄梨子

NPO法人自然塾寺子屋海外事業部

「暮らす旅」で心豊かに

音が聞こえる。夜は沈む夕日を見て蚊帳の中で就寝。現地の人にとってはありのままの暮らしに迎え入れただけかもしれないが、私にとっては生きた博物館の中に身を置き、人々の営みの中でサバイー心地よいを体感できた。

今日人々が旅に求めるのは観光地巡りではなく、何かを体験したり、忙しい毎日の中では向き合えない自分との時間を持つことだと感じる。飾らない暮らしの中に身を置き、鳥の声や吹き抜ける風の涼しさを感じたり、村人と話していると、普段つけている仮面を捨ててポロッと本音が出せる。ささくれた心がそっと癒やされる、そんな空間が求められているように思う。

先日、海外研修員と子どもたちとの交流会を開催した時「肌の色が違うわれわれは道ですれ違う時も距離を置かれます。でも君たちはすぐに仲良くなってくれた。うれしかった!」とコメントがありました。普段から会う人全員にあいさつする「甘楽っ子は、どこのおもてなしより温かい触れ合いができる」と感じました。皆さんが何げなくされているあいさつや笑顔、訪問者との会話だけでも、人々の心を豊かにするかけがえのない宝物だと感じる旅でした。

と「寄っておいで」と声をかけられ、機織りしながらお母さんが話してくれる。横には子どもがお昼寝していて、奥からはお父さんが水浴びする

ラオス・養蚕の村にて

【略歴】京都府出身。嵯峨野高卒業後、米国留学。国際交流に携わり、ホンジュラスで青年海外協力隊員を務めた。2014年から現職。県と甘楽町の地方創生懇話会委員。